

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：32506

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00553

研究課題名（和文）言語接触と言語の均質化の諸相：ソルブ語の事例研究

研究課題名（英文）Language Contact and Aspects of Linguistic Homogenization: A Case Study of Sorbian

研究代表者

笹原 健（Sasahara, Ken）

麗澤大学・外国語学部・講師

研究者番号：10438921

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：研究期間全体を通して新型コロナウイルス感染拡大の影響を受ける結果となり、大幅な計画変更を余儀なくされた。そのような中でも、2023年度に「ドイツ語の影響を受け続けるソルブ語について」、「Sorbian Studies from Japanese perspective」の2件の口頭発表を行なうことができた。また『1か月で復習するドイツ語基本のフレーズ』（2023年、語研）を上梓した。これはドイツ語の語学書であるが、解説部分には本研究課題で得られた知見を多く含み、本課題の副産物として挙げるができる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

多くの言語では、地域による方言差がなくなる形で均質化が進み、言語の多様性が失われつつあることがよく言われている。多言語社会地域における実態はどのようなものであるかを明らかにすべく始めた研究課題である。社会的国際的状況による制約のため、その一端しか明らかにできなかったが、本研究課題に取り組んだおかげで実現した語学書を出版したことで社会への還元をすることができたと思う。

研究成果の概要（英文）："he entire research period was impacted by the spread of the novel coronavirus, necessitating significant changes to the original plan. Despite these challenges, in 2023, I was able to give two oral presentations: 'The Sorbian Language Under Continued Influence of German' and 'Sorbian Studies from a Japanese Perspective.' Additionally, I published 'Ikkagetu de fukusyuu suru doitsugo kihon no fureezu [German Basic Phrases to Review in One Month]' (Goken, 2023). Although this is a German language textbook, it contains many insights gained from this research project and can be considered a byproduct of it.

研究分野：言語学

キーワード：言語接触 ソルブ語 少数言語

1. 研究開始当初の背景

多くの言語では、地域による方言差がなくなる形で均質化が進み、言語の多様性が失われつつあるなか、多言語社会地域においてどのような実態であるのかを探求するのが出発点であった。話者数やその地位において強大な言語がその構成言語の1つである場合、その強大言語が他の言語に影響を及ぼすことがしばしば認められるからである。そのため、ドイツで話されているソルブ語をケーススタディとして、少数言語が大言語によって受ける影響を調査・記述することを行なうこととした。

2. 研究の目的

一般的に、言語の取り替えが起こることなく、少数言語が他の強大言語から影響を受けるのは、語彙の分野、特に名詞や動詞などの内容語である。そして、影響を受ける言語が語彙や文法において、強大言語に似通った特徴を獲得し、両言語が均質化していくことが考えられる。本研究では、言語接触によってある言語が他の言語に類似する言語特徴を獲得するプロセスを捉え、一般化することをめざす。

ソルブ語の話しことばでは、しばしば「テレビ」、「サッカー」といった日常生活で身近な概念がドイツ語語彙として実現する。ソルブ語固有の語彙として *telewizor* 「テレビ」、*kopańca* 「サッカー」があるが、ドイツ語語彙 *Fernsehen* 「テレビ」、*Fußball* 「サッカー」も用いられる。このことは、ソルブ語の語彙体系がドイツ語に均質化していることを示している。加えて、名詞がドイツ語語彙で実現する場合、ソルブ語に存在する格語尾が消失することもある(ドイツ語の名詞は格による語形変化が乏しい)。言語変化については複雑から単純への変化が指摘されている。この考えを突きつめていけば、ソルブ語の動詞人称変化語尾も、より単純なドイツ語のそれと同程度になる方向に進んでもいいはずである。しかしソルブ語において実際は、そのような事実は認められない。これはソルブ語の主語が随意的要素であることと関係があると考えられるが、まだ明らかになっていない。本研究では、このような事象を射程に入れる。

3. 研究の方法

言語接触によって引き起こされる言語の均質化の諸相を明らかにするため、ソルブ人地域(ドイツ)での現地調査(当初予定は2020年8月,2020年12月,2021年8月,2021年12月,2022年8月と計5次)をもとに、3か年のプロジェクトとして、以下の手続きを考えていた。

初年度は形態統語論的分析に取り組み、その類型化を試みる。具体的には、ソルブ語に現れるドイツ語語彙の特徴を見定める。たとえば特定の品詞のドイツ語語彙が用いられやすければ、その品詞が均質化に導くことを示唆している。

「テレビ」、「サッカー」といった語彙にはソルブ語固有の語として *telewizor* 「テレビ」、*kopańcu* 「サッカー」があるが、調査協力者に類似の表現を提示し、その自然さや起こりうる可能性について判断してもらう。その際、名詞や動詞の屈折可能性も問題となる。ドイツ語は名詞の変化に乏しいが、ソルブ語は性・数・格に応じて語尾変化する。たとえば *z czerwonym Fahrradom* 「赤い自転車で」(で 赤い.具格 自転車.具格;ドイツ語 *Fahrrad* 「自転車」;-om はソルブ語の具格語尾)のような表現が許容されるのかを明らかにし、ソルブ語の文で用いられうるドイツ語語彙の範囲をつきとめる。この作業と平行して文献調査をおこない、これまで蓄積されてきた研究を概観する。コードスイッチングに関する研究動向は田崎(2006)が詳しい。同時に通言語的・類型論的な研究成果を精読し、その言語らしさ、すなわち「ソルブ語らしさ」を捉える試みをおこなう。なお、ここで参照する文献は、Myers-Scotton (1993, 2002)などの一般的記述のほか、非印欧語に関する文献も参照し、現地調査に役立てると同時に一般言語学への貢献をめざす。

研究期間2年目以降は形態統語論的分析を継続のうえ、語用論的分析に着手する。ここでは用いられたドイツ語語彙がどのような場合に出現するかの分析を重点的におこなう。同一人物でも、同じ概念を指示するのにドイツ語語彙の使用とソルブ語固有の語彙の使用が揺れる。この揺れを記述し、体系化することを目指す。会話の主題やジャンル、話し相手との親疎の度合いや属性に特徴が見られれば、社会言語学の知見に新たな視点を提供できる。

語用論的分析で一定の成果が得られたのちに、総合的分析をおこなう。ここでは、ソルブ語とドイツ語の対照研究に重点を置いて、調査・考察する。たとえばソルブ語では「たぶん」というモダリティ語がドイツ語語彙 *vielleicht* で実現することがある。ソルブ語では *filajcht* 「たぶん」という形式でコード化の途上にある。この *filajcht* がドイツ語 *vielleicht* と同じ出現位置で同じ意味機能を持っているのか、といった点を明らかにすることで、類型化されたドイツ語語彙がソルブ語の中でどのように機能しているかを考察し、記述していく。両言語の異同を示すことで「ソルブ語らしさ」を確定でき、ソルブ語文法記述の精緻化を図ることができる。この視点は従来考慮されてこなかった分野であり、内外のソルブ語研究者に多くの示唆を与えることができる。また、語派の異なる2つの言語の関係を論ずることで、ドイツ語学(特にドイツ語方言学)への展開も期待できる。

4. 研究成果

上に述べた研究の方法であるが、研究期間全体を通して新型コロナウイルス感染拡大の影響を受ける結果となり、大幅な計画変更を余儀なくされた。初年度は予定していたドイツでの現地調査を実行することが不可能となった。そのかわり、これまでに収集した資料を基に、ソルブ語に現れるドイツ語語彙をまとめる作業をおこなった。2022年8月に実施した現地調査も大幅に縮小せざるをえず、ソルブ研究所(パウツェン)での文献調査のみとなり、ソルブ語使用地域での音声言語資料収集は断念せざるを得なかった。このため予定を変更し、ソルブ研究所所蔵文献の精読に多くの時間を充てた。このような状況であったため、1年間の研究期間延長を行ない、2023年度まで本研究課題に従事した。本研究課題のための音声資料を収集することがほとんどできなかったが、文献調査で得られた知見により、進捗することができたのは収穫であった。しかしながら、将来への最低限の橋渡ししかできなかったことが残念である。

2023年度に「第6回欧州学フォーラム&第1回モラビア学・スロバキア学フォーラム 2023 ヨーロッパ圏の多様性と均一性」(2023年11月4日(土)、5日(日)、於神戸市立灘区文化センター)にて「ドイツ語の影響を受け続けるソルブ語について」、ワークショップ「マイノリティ言語研究の視座～スラヴ語圏を例に～」(2023年12月3日(日)、於東京大学)にて「Sorbian Studies from Japanese perspective」と口頭発表を行なった。いずれもドイツ語との影響下にあるソルブ語らしさを論ずる発表である。傍証となる根拠に乏しい主張ではあったが、これまでの考察を言語化するにはいい機会となった。また、この2023年度には『1か月で復習するドイツ語基本のフレーズ』(語研)を上梓した。これはドイツ語の語学書であるが、解説部分には本研究課題で得られた知見を多く含み、本課題の副産物として挙げるができる。

研究期間全体としては、申請当時に目論んでいたソルブ語で用いられるドイツ語語彙がどのような場合に出現するかを明らかにすることが叶わず残念ではあるが、次の研究テーマにつながる発見を得ることができた。

研究期間を延長して迎えた2023年度になって、ドイツの社会情勢が好転し現地調査を進められる機運が高まってきた。しかしながら国際情勢が不透明であることもあり、今後も研究計画に掲げた目標をできる範囲で進めていかざるをえない。本研究課題の研究期間は終了してしまったが、本研究課題については今後も追求していく予定である。将来的にはソルブ語とドイツ語の対照研究に軸足を置いて研究を進めていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 SASAHARA, Ken	4. 巻 -
2. 論文標題 Sorbian Studies from a Japanese Perspective	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 -	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 笹原 健
2. 発表標題 ドイツ語の影響を受け続けるソルブ語について
3. 学会等名 第6回欧州学フォーラム & 第1回モラビア学・スロバキア学フォーラム2023 ヨーロッパ圏の多様性と均一性
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 SASAHARA, Ken
2. 発表標題 Sorbian Studies from Japanese perspective
3. 学会等名 ワークショップ「マイノリティ言語研究の視座～スラヴ語圏を例に～」
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 笹原 健	4. 発行年 2023年
2. 出版社 語圏	5. 総ページ数 216
3. 書名 1か月で復習するドイツ語基本のフレーズ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------